



## 川虫も元氣

## 子どもたちも元氣

富 樫 繁 春

「ヘビトンボの幼虫は、孫太郎虫と呼ばれ串ざしにして焼いて漢方薬として珍重されました。子どものお寝しょはこれ一発で直ります。皆さんの中で悩んでいる人は、後でそつと教えてください。作り方を教えます。」

「どんな味がするの？」

「いや、残念ながら、私は食べなくともよかったですから……。」

これは、夏休みに実施した「水生生物による水質判定」に参加した小学生とのやりとりの一部である。

集合時にガヤガヤしていた児童も、いざ開始ともなると、網を使って虫採りに夢中にな

る。そして、「この虫の名前を教えてください」と熱心である。中には、川の中ですべって転んで半身を濡らしてしまう子も一人や二人は必ずいる。最後は、エイ！と全身ずぶ濡れとなる。どうなるのか？見守っていると、バスの中に戻って着替えてくる。ちゃんと用意していたのだ。調査そつちのけで、川岸の小魚を夢中で追いかける子。今年は、カジカガエルを捕まえ、手に握って離さない子もいた。昨年、川の中で気持ち良さそうに放尿した子もいた。私どもの子ども頃と大差ない姿がそこにあった。

川の水質は、時々刻々と変化するので、何回かの調査の化学分析の平均値で表される。それに対して、どんな生物が生息しているかで、その地点の水質の程度を知るのが、生物調査の目的である。これは、川虫が生きていた時間（数週間から半年、長いもので四年）の水質を反映しているので、一回の調査で、平均値に近い値がその場ですぐに得られるという利点がある。

にいかした

# 北から南から



毎年、一級河川は国土交通省が、二級河川は環境省（県内では保健所）が担当し、市民や近隣の小学生等の協力を得て実施している。昨年からは、両省で、判定に用いる指標種も三三種（タクサ）に統一された。水質は、四ランクに分かれ、冒頭のヘビトンボは「きれいな水（水質階級Ⅰ）」の指標種というわけである。肉眼的生物で種数もわずかな上に、テキストの図版を見れば十分分かりそうなのだが、実際は、初心者にはどの虫も同じに見えてしまう。かくして、私のような者が引っ張り出される。

担当は県北の四河川だが、予備調査とデータ整理、資料・標本作り等と当日を加えると二週間は優に費えてしまう。しかしながら、どの川にも個性があり、県外の研究者が羨むほど生物が豊富だ。沢山の川虫と子どもたちの元気に出会える喜びは、何物にも替え難い。参加した子どもたちが、川に親しみ関心を持つきっかけになれば、望外の幸せである。

最近では、「総合学習」流行で、川をテーマ



にとりあげる学校・学級も出て、度々呼び出されたりする機会がふえてきたので、川虫の知名度も少しは上がってきたのかも知れない。「総合学習」も、本来は、地域の自然や文化を子どもたちに教え、伝えていこうという自前で地道な調査研究の裏付けのある営みなのだ。

（とがし しげはる・新潟県立村上養護学校）